

【一般演題3】 第14席

『類経図翼』の諸證灸法

東京 北江 瀧也

今日の鍼灸臨床は、鍼が主で灸が従というスタイルがオーソドックスとなっているようである。しかし近年の出土文物や、それ以降の医書群から受ける印象は、日中を問わず逆に灸が主で鍼が従である。

『類経』は明代の張介賓（1563～1640）の代表的著作である。『類経図翼』は『附翼』と共にその姉妹編というべき書で、『素問』『靈枢』の経文解説から発展し、張介賓の医学思想を前面的に打ち出した書である。

『類経』は江戸初期に本邦に伝わり、その後の日本鍼灸に決定的な指針を示した。寛文期（1661～1672）に饗庭東庵、林市之進らが『内経』を講義したとされるのは、実は『類経』を通しての『内経』講義であった。その後の日本医学・鍼灸界においては、『類経』本文を解体編纂し直して、新たに『素問』『靈枢』を刊行するなど、見えざる利用法もなされてきた（現在の臨床家もそれと知らずに類経本『素問』『靈枢』を利用しているものもある）。

『類経図翼』の十一巻に「鍼灸要覧」のタイトルがある。ここに「諸證灸法要穴」という主に灸法の主治病證の大綱24種が記載されており、各主治穴も併記される。この部分は『類経図翼』の具体的臨床指針部分として非常に重要である。というのも、16世紀から17世紀の本邦の代表的灸法書において、ここからの抜粋で一書をなすほどの影響を示しているためである。では、この部分はどのような時代的・思想的背景で書かれたものか。

前回まで演者は16世紀日本の灸法を検討した。その結果その基盤となっているのが、他ならぬ『類経図翼』であることが分かった。本発表では、『類経図翼』を通じ明代鍼灸、特に灸法の治療における枠組みを検討することによって、灸法の臨床および明代病證学のメカニズムを探ろうとするものである。